

# 「新型コロナウイルスとの闘い、 在外の学校現場から」

トルコ イスタンブール補習授業校 校長 吉田 和美

# 目次

- ① 本校について
- ② 現地の新型コロナウイルス事情
- ③ 新型コロナウイルスの対策を講じなければいけなくなった経緯  
と実際の取り組み
- ④ 苦労したこと<オンライン授業の準備から実施まで>
- ⑤ 喜びを感じた（感じている）ことと今後への課題

# ① 本校について

- 本校はアジア大陸とヨーロッパ大陸にまたがる都市、トルコ共和国イスタンブールに位置している。1985年にイスタンブール日本人会を母体として設立、今年で36年目を迎える。
- 平日は現地校や国際学校に通う準備クラス(5歳児)、小学部、中学部の児童生徒を対象として、土曜日(年間40回)に日本人学校の校舎で1日3時間、準備クラスは基本的学習態度や数字、文字などを中心に、小中学部は国語と算数・数学をそれぞれ90分ずつ学習している。(国語は日本語環境などに応じて、ゆっくりコースもある。)
- 現在の児童生徒在籍数は70名である。講師9名と隔週で準備クラスを担当するアシスタント講師2名、保護者と講師から構成される運営委員会8名。保護者のサポートの力は大きく、遠足や運動会、季節の行事などは保護者を中心に準備実施されている。常に運営委員会、保護者、講師会が三位一体で本校を支えており、在イスタンブール日本国総領事館や日本人会、日本人学校からも常に温かい支援を受けている。

## ② 現地の新型コロナウイルス事情

- 3月12日にトルコ政府が全土の教育機関の休校(3月16日～4月13日)を発表、その後、休校延長を繰り返し、5月末現在、6月より保育園を開園、その他の教育機関は夏休み明けまで休校となっている。
- 年齢による外出制限(65歳以上、20歳以下)や都市間移動制限、公共施設やレストラン等の一時閉鎖などが実施されたが、6月より徐々に緩和されていく様子である。
- 4月4日から今日(5月末)まで3日間の外出許可日を除いて、外国人も含む20歳以下は外出禁止令が出ている。しかしながら、トルコ国内でのオンライン授業は、内容にばらつきがあるものの公立私立とも3月下旬から行われており、このような厳しい状況下において特筆すべきことであると感ずる。

### ③ 新型コロナウイルスの対策を講じなければ いけなくなった経緯とその取り組み

- 3月12日にトルコ政府が全土の教育機関の閉校を発表したことを受けて、本校は3月28日が修了式・卒業式であったが、3月14日の授業を最後に4月11日まで休校と運営委員会で決定した。
- 休校分と春休みの宿題は、各担任が課題を作成し、メールや郵送で各家庭に配布したが、この頃までは、4月11日に行われる入学式始業式は実施できるかもしれないという淡い期待もあった。
- しかし、トルコ政府が3月25日に追加措置として、4月30日までの閉校措置を通達したため、翌日本校も運営委員会で同様の休校決定をした。その後の対応処置として、運営委員会は保護者にオンライン授業を希望するか、同時に講師会も対応できるか調査、保護者の多くはオンライン授業希望、講師も完全な授業は望めないが対応することを決定した。双方の相互理解の構築し、講師会の準備を考慮して、まずは国語のみのオンライン授業を開始することに決定。授業時間は90分に設定した。（6月半ばには、算数数学も動画と課題を配信開始予定、その後も算数数学オンライン授業開始に向け準備を開始する予定。）

- 事前に各家庭のデバイスの数やWIFI環境を各担任が丁寧に聞き取り、クラス編成も兄弟姉妹、講師の子弟が重ならない時間割の組み替えを試行、適切なデバイスのない家庭にもあらゆる方法を考えて提供を思案、ひとり残さずオンライン授業に参加できる体制づくりを目指した。
- 教科書については、トルコ政府から外出禁止が発令された場合、引き渡しができなくなることから、児童生徒全員に教科書が行き渡るまで発令が出ないようにと祈る気持ちであった。各児童生徒の手元に教科書がない状態でオンライン授業を受講させることは、どうしても避けなければならないと考えていた。  
対応可能な講師が領事館にて全児童生徒の教科書の引き取り、仕分け、配送、保護者も学校引き取りが可能な場合は細心の感染防止対策をして来校、無事、全員の手に行き渡ったことは、幸運なことであった。
- 不安な状況下、総領事館や日本人会から支援や励ましのお声を頂いたことで、本校は孤立していないという安心感につながったことは言うまでもない。

## ④ 苦勞したこと ＜オンライン授業の準備から実施まで＞

- どの講師も未曾有の感染症拡大不安の中、子供たちの教育を止めないためにと、オンライン授業への舵取りにすぐに賛同してくれたことは本校の大きな力である。また、運営委員会が「先生方、できるところからでいいです。」と当初から励ましてくれたことが講師のモチベーションとなり、4月11日の第1学期初日から、パワーポイントなどを駆使してのかなり質の高いオンライン授業を実施できたのではないかと自負している。
- とはいえ、オンライン授業実施決定から初日までの講師陣（全員がオンライン授業は初めての経験である。）の苦勞は並大抵のことではなかったと振り返る。校舎で研修会を行う状況ではなかったことから、使用方法が習得しやすいZOOM使用のオンライン授業を行うため、事前に接続方法や基本操作の研修を同じくZOOM会議を使用し何度も実施、講師相互でサポートしあい、数知れない連絡を取り合った。オンライン授業開始後も、毎週、講師会では授業後に2時間程度の会議を行い、授業方法やZOOMのセキュリティを確認するための情報を常にアップデートするように努めている。

- 講師会同様、運営面のリーダーシップをとる運営委員会の保護者も、今日に到るまで重責を背負いながらの奮闘の日々である。4月に運営委員を交代したばかりで、家庭での子供のオンライン授業のフォロー、毎日3食の食事作り、家事、テレワークの家族のフォローもしながら、空く時間は夜だけ、という状態から、夜な夜な、時には日をまたいでオンラインミーティングをしている状態である。
- 「普段の学校以外に補習授業校で学ぼうとして頑張っている子供たちの教育の場を守り、この緊急事態で学校を窮地に追い込まないように、それだけを考えている。今までこの補習授業校を大切に守りつないできた方々の思いをなんとか次につなげたい。」これは、今年度の西堀運営委員長の思いである。

## ⑤ 喜びを感じたことと今後の課題

- 現地校でも毎日オンライン授業が実施され、課題も宿題も多い本校の児童生徒である。勿論、本校も学習の場であることに変わりはないが、外出のできない子供たちの心のストレスは大人以上に大きく、この先の影響も計り知れないことから、少しでもその心が解放される場でもあってほしいと願っている。
- 児童生徒が時間通りに画面の前で挨拶をしてくれて、大きな声で発言をくり返してくれる明るい姿は、講師会にとってはかけがえのない宝物である。こちらに気を使ってか「先生、オンラインもいいけど、早くみんなで会いたいね。」という子供の覗き込むような顔に思わず笑みがこぼれることもある。講師は写真メールなどで提出された宿題に工夫を凝らして、はなまるやコメントをつけて返却しているが、「先生、ありがとう。また、いっぱいのはなまるほしいな。」と言われると、慣れない写真メールへのコメント入れも力が入る。

- 案外、子供達から力をもらっているのは、我々の方であると思わされることが多い今日この頃でもある。
- 授業外でも、オンラインで児童生徒の個別面談をしたり、クラス休み時間と称して子供達に自由な発言の場を設けたりして、講師会は授業以外にもなるべく新しいアイディアを取り入れる工夫もしている。
- 今後も運営委員会、保護者、講師会でがっちりと補習校を支え、このイスタンブールで子供達の教育の場を守っていく覚悟を問われているこのコロナウィルスとの闘いの時なのかも知れない。